
FLASH

天川 榎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FLASH

【Nコード】

N3586C

【作者名】

天川 榎

【あらすじ】

天才学生が、タイムマシンを生み出し、友人が乗せられ・・・、色々な衝撃が彼を成長させた。そんなSF冒険小説です。一度で良いので読んで下さい。

第一回 キミの見たもの

世界には、理論とか、不思議現象とか、ヘンなものが溢れているような気がする。しかし、自分には、全て嘘としか思えない。

特に、タイムマシーンなんか。

人間は、何処まで可笑しくなれるのか・・・

俺の妄想は、無限に広がっていくばかりだった。

FLASH（全三回）

第一回 キミの見たもの

いつものように電車に乗り込み、学校に向かった。

窓から見える風景は、不気味にそびえ立つコンクリートの塊と、ただただ流れるだけの白い物体と澄んだ青い空。

・・・都会は嫌だ。

そんなこんなで、学校の最寄り駅に着いた。

いつも友人と待ち合わせをしているので、大体10分程待つ。

彼奴^{あいつ}は、いつも平気で約束の時間をオーバーしてやってくる。だけど、それでも良い。なんせ、彼奴は、「天才博士」ですから。

「すまん、遅れた」

「堂場和博」・・・それが奴の名だ。

「今日は、何の研究してたんだ？」

「ああ、今日は、昨日の続きだよ。三年間掛かった研究が、遂に終わりそうなんだ」

「やめとけ。あんなモン出来る訳ない」

「もう既に、動物実験はしました。完璧です」

まさか、あの時読んだだけの物理学の本でこれだけの成果を上げられるとは……。恐るべき天才。

「という訳で、放課後理科室来てくれ。最後の調整段階だから」

そんなこんなで、奴主催の「SF研究部」に招待された。

*

放課後、騙されたと思って理科室の前まで来てみた。

どうせ、タイムマシンなんて作れるはずがない。作れたとしても、大学教授レベルだ。その前に、俺はタイムマシンなんて信じない。

俺は、奴を鼻であしらってしまった。

しかし、理科室に入った瞬間、何かいつもの空気と違った。

目の前に広がっていたのは、そびえ立つ巨大な物体だった。

「やあ。遅れてすまない」

奴は、呑気に笑ってやってきた。

「こ、これ、どうやって持ってきたんだよ!」

「ああ、気にしない気にしない」

（気にするよ）

「それで、見せてくれよ。タイムスリップする瞬間をよ」

「なら、キミが乗ってみれば?」

（ちょっと待った。何で俺が乗らなきゃいけないんだ!

結局俺は動物扱いか? ひでえ奴だ)

「お前が乗れよ。やつぱ作った奴自身が乗った方が、今までの苦勞が晴らせるんじゃないか?」

「それはそうですが、ボクはいつでも乗れます。だから、今しか乗

れないキミに頼みたいんです。」

確かに。だが・・・、どうせ偽物だろう。「うわーすごい」とか叫んでやりゃあ、彼奴も満足するだろう。

「よし！じゃあ、乗ってやるよ」

「分かりました。ではこちらへ」

言われるがまま、タイムマシンに乗り込んだ。

もしかすると・・・、いやいや。タイムマシンなんかできっこない。

俺の頭は、非現実的な今の状況についていていなかった。

頭がこんがらがってきた。

奴は、俺をタイムマシンの座席に案内した後、ここから離れた。

「じゃあ、緑のボタンを押して」

「分かった分かった」

何も考えずに押ししてしまったのが、馬鹿だった。

周りの景色はたちまち砂嵐のようになり、暫く経ったあと、強烈な光が俺を襲った。

俺は、思わず目を閉じ、

気絶してしまった。

<第一回 終>

第一回 キミの見たもの（後書き）

最近某アニメを見た影響か、またSFに夢中になってしまいました。

そんなこともあって、今回は楽しい冒険小説に・・・なるかもね。

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

目覚めると、既に風景が様変わりしていた。

今まで殺風景な部屋から、青空とコンクリートビルが軒を連ねている市街地になっていた。

「ここが、未来か……」

俺自身も、既にこの現実には半ば諦めかけていた。

「やあ。元気！？顔色悪いな、お前」

何処か機械的、だが人間味のある声がタイムマシン内に響き渡った。

「だ、誰だよ。タイムマシンには俺しか居ないはずだが」

俺の背筋に、ドライアイスをぶつけられた様な衝撃が走った。手が小刻みに振動している。

（もしかして、未来人に見つかった？やべえ！！殺される・・・）

「お前、実は独身だろ」

「は？」

その声の主の正体は直ぐに分かった。彼奴が仕掛けた、オペレーシヨンのロボット「セレス」だった。

（何でこんなモンが入ってんだよ！ビックリしたぜ）

「ところで、この世界の西暦は何年だ？」

「3052年、ってとこかな」

「ってとこかな、ってちよつと！俺が居た時代からざつと1052年後か。何でこんなとこ来ちゃったんだよ・・・」

「あなたは、使命が有るから未来に来ることが出来たのです」

セレスは、声色を変え、常人には理解不能な宣言を俺に投げかけた。

「どういうことだよ。説明してくれ」

「つまり、『未来に影響を及ぼす者しか、時空を超えられない。』

ということです。よって、あなたは、『選ばれし者』とでも言うておきましょう」

「へえ。で？」

「で、って言われても、困る」

「使えねーロボットだな」

「この世界では、『ロボット』は差別用語です。失礼な人間です。この世界では、『ロボット』ではなく、『アンドロイド』と呼んで下さい」

「さっき自分のこと、『ロボット』って言ったじゃん」

「あー！」

そんなこんなで、人間とロボッ、じゃなくて、アンドロイドという異色のパーティが出来上がった。

そろそろ、タイムマシンも飽きたので、外の空気を吸うことにした。

＊

昔と変わらず、無機質な世界に緑のスペース。人間は、考えが短絡的。この辺全部緑にして、コンクリ塔達を一本に纏めれば、地球温暖化だって・・・そういえば、昔に比べて涼しいっていうか、寒い！

「なんか、寒くないか？」

「私は別に。なにしろ「アンドロイド」ですから。あと、ついでに言っておくけど、後もう少しで地球は氷河期に突入するんだって」

「え？」

「だから、今地球の季節は「解・水・結・氷」っていう名前になったんだ。」

「じゃあ、「地球温暖化」はどうなったんだ？」

「地球温暖化か。懐かしいな。地球温暖化は、実はデマ。地球には、「温暖期」っていうものがあることに、気づいたんだ。ほら、よく考えてみて。最近噴火や地震が多いじゃん」

「あ！そういうことか」

「そう。つまり、知らず知らずに、熱は色々な所から放たれていた、っていう訳」

「っていうか、ホントかよ」

内心、ココは本当に未来なのか、疑問だった。やけに、俺の時代に有ったものが、未だ地球に居座ってやがる。もしかして、旧市街地か？

「着いたよ。ここが、貴方が住んでいた、「旧市街地」です」

それは、あまりにも、目を瞑りたい光景だった。

最初に見た物は、美化された物だと、ようやく気づいた。

「ここは、「第三次世界大戦」で、核爆弾が炸裂した町、「青木町」。
今は、世界遺産として、保存されているわ」

「そんな・・・、ふざけんな！そんな訳あるか。「二ホン」は、戦争しないんじゃないのか？」

「そんなの、嘘に決まってるじゃん。「二ホン」は、中国とアメリカ合衆国との戦いに巻き込まれ、中国側に付いた。その報復として、ココに核爆弾を落とした。訳の分からない内容で、ココは跡形も無く破壊された・・・。」

その後、中国は、その報復として、アメリカ合衆国を総攻撃した。そして、中国の大勝利に終わった」

「そう、なんだ」

俺は、後続く言葉が思い浮かばなかった。

「あなたには、この現実を阻止するために、働いてもらいます」

「え？それとこれとは、関係無いだろ」

「実は、時空分岐は、貴方の決断から始まっていたのです」

（第二回 終）

第二回 地獄変（後書き）

すいません！

昨日更新するはずでしたが、間に合わなかったなので、勘弁して下さい。

最終回 おおきなこころ

あれから、十年経った。

俺の決断で世界が変わる・・・か。

あんまり信じられない。

だけど、俺は彼奴が何で未来に俺を飛ばしたのか、

ようやく理由が分かった。

俺は政治家になった。

もちろん、総理大臣になってみせる。

だけど、運命って変えられるのかな？

実は、俺は運命に遊ばれているんじゃないか？

それはない。

俺が選んだ、道だから。

俺の選択は、戦争を起こさせない。

絶対、みんなを守ってみせる。

例えこの街から火が立ち上っても、

その後、

おおきなこころは

くもにきえていった。

そらに

<FLASH
完>

最終回 おおきなこころ（後書き）

最後まで読んで頂き誠にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3586c/>

FLASH

2010年10月9日20時24分発行